

漁船漁業の再生をめざして ～ 笠沙地域の漁船漁業の存続に向けて ～

笠沙町漁業協同組合 漁船漁業振興会 宮下 清和

1 地域の概要



図1 笠沙町漁協の位置図

私たちが生活している南さつま市笠沙町は、薩摩半島の西端に位置し（図1）、美しいりょう線を見せる野間岳のすそ野にあり、農林水産業の盛んな地域である。

「旧」笠沙町は、平成17年11月に近隣の加世田市・笠沙町・大浦町・坊津町・金峰町の1市4町と合併し「南さつま市」となった。現在の南さつま市の人口は約3万7千人、海岸線の北西部は砂丘地帯、南西部は変化に富んだリアス式海岸を形成し、坊野間県立自然公園の指定を受けた景勝地を有している。

2 漁業の概要

私が所属している笠沙町漁業協同組合の平成25年度組合員数は、212名（正組合87名、准組合員125名）で、高齢化が進み組合員数は減少傾向にある。（図2）

豊かな海岸線を利用した定置網を始め養殖、ひき縄、一本釣り、刺し網と多様な漁法が行われている。

当漁協の平成25年度の水揚げ量は、1,441トン、水揚げ金額3.1億円で、その60%以上を定置網漁業が占め、漁協の主力漁業となっている。（図3）。

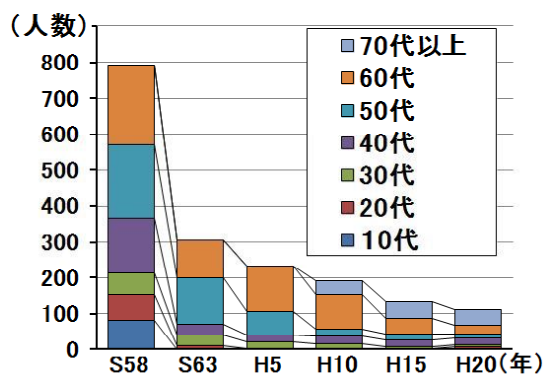


図2 年別・年齢構成の推移(センサス)

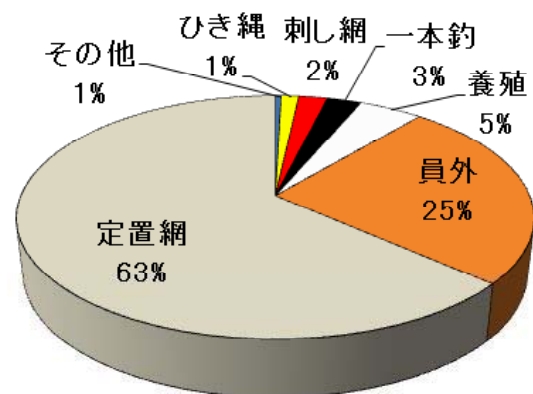


図3 水揚げ金額の漁業種類別構成比

3 活動グループの組織と運営

私が現在、会長を務めている漁船漁業振興会は、漁法の研究・改良や経営の安定化を

図ることを目的に設立された。以前は40名を超えた会員も、漁船漁業の衰退とともに減少し、現在は、わずか12名となっている。平均年齢も70才代と高齢化し、現在39才の私が最年少である。

振興会の活動は、ひき縄釣り漁業の漁獲尾数の割当てや漁法の研究のほか、海岸清掃や先進地視察研修等を行っている。

4 研究・実践活動取組課題選定の動機

私は、昭和50年に地元、笠沙町で生まれ、父の漁業を見て育ち、漁業者になるべく地元の水産高校に進学した。卒業後、枕崎市漁協の自営船である遠洋カツオ一本釣り漁船に従事した後、当時、笠沙町にあったマリノフォーラム21が行っていたクロマグロ養殖試験にも従事した。そして平成10年、自分で漁業を営みたいと思い、父親のもとで漁業に従事し、ひき縄や刺し網、一本釣り漁業等、いろいろな漁法に取り組み、経験を積むことができた。その後、漁船を購入し漁業経営を開始した。

5 研究・実践活動の状況及び成果

(1) ひき縄釣り漁業における種苗用活魚の生存率向上の取組

夏季は、魚価の高い魚種が少なく、収入が減少するのが悩みの種であった。昭和62年ごろ、マグロの試験養殖の種苗用にヨコワを取ってくれないか、と水産試験場から依頼があった。また平成元年には東京の葛西水族館がオープンし、展示用のカツオやマグロ類の注文もあり、活魚の取扱が増加した。(図4)

漁獲した魚は、養殖種苗用や展示用として取引されるので細心な取扱いが必要である。私が着業する頃には、先輩たちが試行錯誤を繰り返し、「かえし」の部分ペンチでつぶした擬似針を用い、テグスや金具を使って針から外して魚倉に入れる漁法は確立されていたが、活かす技術に問題が残っていた。(図5)

マグロやカツオは皮膚が弱く、針から外すときに器具に触れると、触れた箇所が傷になる。活かし釣りの場合、船尾で漁獲し、船首にある魚倉へ海水とともにパイプを利用して送る方法が一般的であるが、この方法ではパイプに触れた箇所が傷になりやすい。傷ができると、そこから病気になりやすいばかりではなく、

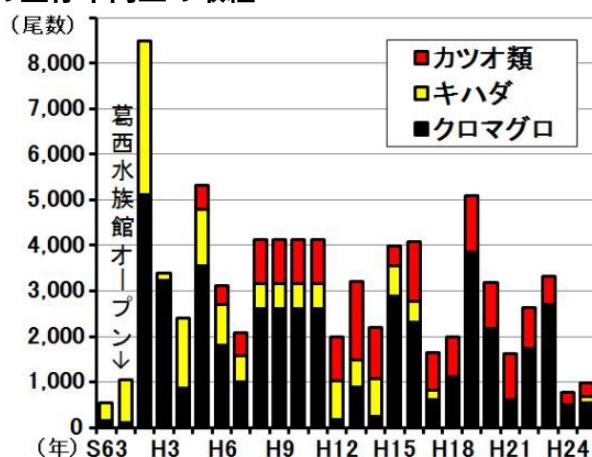


図4 ひき縄釣りの漁獲尾数の推移

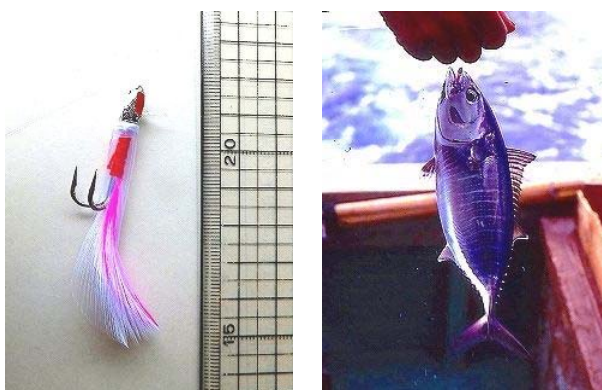


図5 擬似餌とマグロの扱い

見栄えが悪く展示に向かない。

その対策として、擬似針の頭の部分を持ち、ひっくり返すように針を外す、一番シンプルな方法に落ち着いた。またパイプを使わずバケツに入れて、船首にある魚倉へ運んでいたが、現在は、船尾に魚倉を設置し、釣ってすぐ魚倉へ入れている。(図6)

釣ったとき魚体の状態、針のかかり具合、出血の程度や魚体の擦れ、シイラ等によるかみ傷はないか観察し、それらをクリアしたもののみを収容するように心がけた。

カツオやマグロは、広い海を高速で泳ぐ習性があり、漁船の魚倉に入れたとたん、突進して泳ぎ魚倉の壁に激突するので、次に衝突を防ぐため工夫を魚倉に施した。

魚は水槽の中を、円を描くように泳ぐことから、形状は正方形にした。底の形状も、船底に沿ったV字型では、魚の腹を擦ることがあるので平らにした。

魚倉の壁は、魚が落ち着くよう黒く塗り、そうすると壁の識別ができず、かえって衝突の危険性が高まるので、壁の目印の意味で網目状に線を入れた。こうすることで、壁面への衝突を低減することができた。(図7)

また、当初、電動水中ポンプを使って換水したが、カツオやマグロは、酸素消費量が多いため、収容尾数が多くなるとへい死が発生した。電動水中ポンプを2台に増やしても水量が足りないと考え、現在は、農業用のエンジン・ポンプを積み込み、注入する海水の量を増やすことで、生存率を上げることができた。

これらの取り組みにより、笠沙町漁協の種苗は、傷がなく、生存率が高いと、市場から高い評価を得ている。特に水族館からの注文は、葛西水族館や名古屋水族館等、全国から舞い込み、香港等の外国からの注文もあった。



図6 船尾に魚倉を設置



図7 魚倉の状況

(2) 刺し網漁法の改良への取組

刺し網は、夕方に網を仕掛け、翌朝、取り上げる漁法である。(図8)

刺し網漁法は、効率的な漁法だが、定置網漁業で漁獲される魚と比較すると、定置網は漁獲されたときに生きているのに対し、刺し網の魚は死んでいるので、鮮度が悪いと見なされ、魚価も安価になる欠点がある。少しでも魚価を上

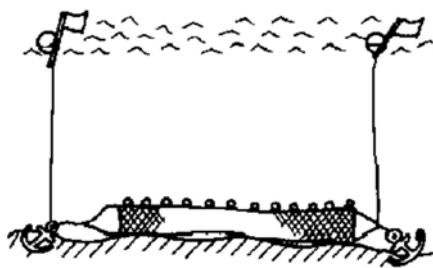


図8 固定式刺し網の操業図

げるため、鮮度への取組が必要となった。

死んでいる魚では、鮮度保持ができないので、漁法の改良を思い立った。網を仕掛けて魚が捕るのを待つのではなく、魚群探知機で魚群を探し、魚群が移動する方向を推測、先回りして網をCの字型に仕掛ける方法である。(図9)

網を敷設し、30分から1時間ほど置いてから引き上げることにより、生きたまま漁獲することができるようになった。網から取り外し、すぐに氷り締めすることで鮮度を保持し、また、マダイ等の魚価の高い魚は、活かして活魚出荷もできるようになった。

加えて、網の改良にも取り組んだ。私の主な漁獲対象魚種であるマダイやチダイ等のタイ類を、効率よく漁獲できるようにである。県の水産業普及指導員や近隣漁協の指導漁業士のもとで、タイ類の行動パターンについて勉強させてもらう等、いろいろお世話になった。なかでも「タイは網越えをする」は、とても参考になった。許可の制限条件の上限近くまで網丈を高くすることで漁獲量を増やすことができた。そればかりではなく、形の良いマダイも漁獲できるようになり、一石二鳥の効果となったのは喜びである。

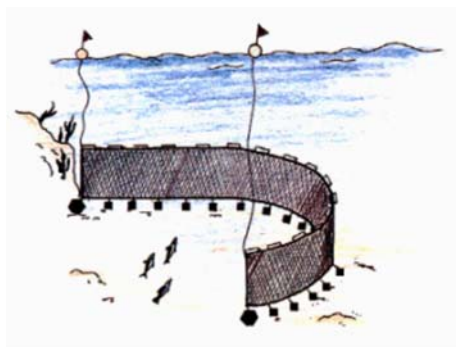


図9 Cの字型に敷設

6 波及効果

(1) ひき縄釣り漁業の波及効果

活かす技術の改良により、ひき縄釣り漁業で安定的にカツオやマグロを活かして漁獲できるようになったことから、まとまった尾数の注文を受けるようになった。漁業者が個別に請け負うより、漁船漁業振興会が一括して業者と価格交渉した方が、漁業者の手間が省け、漁業者間の差がなくなるので、個人ではなく、漁船漁業振興会で注文を受けることとした。

また、契約ばかりではなく、漁獲尾数を均一に漁業者に配分し、かつ漁獲の少ない会員へ、多く漁獲した会員の尾数を配分する等の調整も行っているほか、漁獲が契約尾数に達したら、速やかに操業を停止する等、資源管理にも一役買っており、漁船漁業振興会が大きな存在意義を持つようになった。

(2) 刺し網漁法改良の波及効果

刺し網漁業で生きたまま漁獲できるようになったことから、小型魚の再放流が可能となり、資源保護や資源管理につながっている。

今後は、GPSデータと漁獲データを蓄積し、資源動向や資源管理に役立てたいと考えている。

7 今後の課題や計画と問題点

私の父や地元の先輩漁業者を始め、県内の様々な漁業者の方々から指導していただきながら、漁業のスタイルを確立していった。(図10)

図10 年間操業スケジュール

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
マグロひき縄							←	→				
イセエビ刺網										←	→	
ヒラメ刺網	←	→										
ダイ固定刺網	←	→										

固定式刺し網を主体に、夏季はマグロひき縄、10月から年末にかけイセエビ、春先はヒラメ刺し網を操業している。

(1) 後継者育成

最近の漁業は、原油や資材が高騰しているのかかわらず魚価は安く、経営を二重、三重に圧迫し、非常に厳しい状況にある。そのため、どの漁協も抱える悩みだとは思いますが、私の笠沙町漁協も、漁業への新規就業者がなく、高齢化と組合員の減少が進んでいる。現在、87名の正組合員のうち40歳以下の組合員は、私を含め3名しかいない状況である。漁業を取り巻く環境は厳しいものがあるが、これからの展望を考えると後継者の育成は急務であると思っている。

しかし、現状は漁業経営が厳しく、親が漁業をしても、子供に漁業は継がせたくないという雰囲気がある。これを打破するためには、自分が漁業をしっかり営み、漁業で食べていけることを示すことが、大切ではないかと感じている。

(2) 新しい漁法への取組

刺し網は、大漁した時、漁獲物を網から取り外すことに時間がかかり、市場の開場に間に合わないことがある。こうなると、翌日の市場への出荷となるため、せっかくの大漁なのに、安価に買ったたかれ、水揚げ金額が下がることになる。そうでなくても、最近の魚価の低迷には頭を悩ませている。笠沙町漁協の総水揚げは、年変動があるものの漁獲量はほぼ横ばいで推移しているが、水揚げ金額は減少傾向にある。(図11)

私の水揚げも、努力した結果、水揚げ数量は増加傾向にあるが、金額はむしろ減少傾向にあり、漁業経営の大きな問題となっている。(図12)

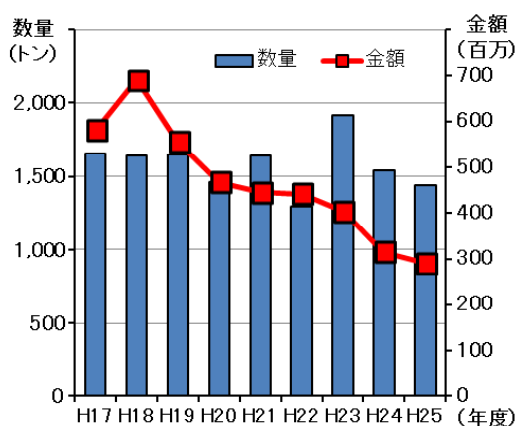


図11 漁協の水揚げと金額の推移

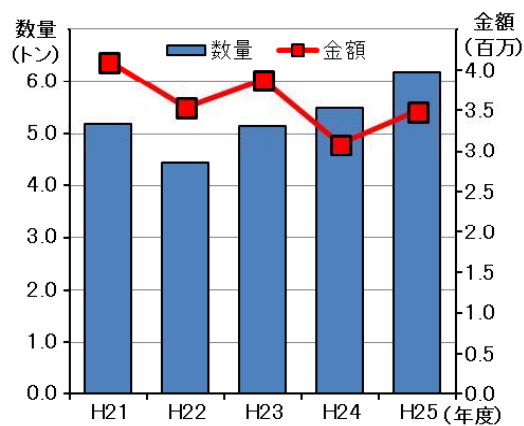


図12 水揚げと金額の推移

私の主要漁獲魚種は、チダイ、ヘダイ、ヒラメであり、この3魚種で水揚げの半数を占めている。これらの魚種については、活かして漁獲し、市場に間に合うよう優先的に取り外し、氷シメする等の鮮度保持の取り組みを行った結果、漁獲量、平均単価ともに、ほぼ横ばいで推移している。(図13)

しかし、ここ数年ひき縄釣りが不漁であることや、主要漁獲魚種以外は、単価の下落が大きく、総じて水揚げ金額も減少傾向にある。

このため、刺し網主体の現在の状況に限界を感じ、近隣の漁業士に相談したところ、ごち網漁業の操業区域拡大の要望をしており、それに併せてごち網漁業の新規許可を申請したらどうか?、と指導していただいた。

ごち網漁業は、袋状になった円形の網でタイ等を選択的に、効率よく漁獲する漁法である。刺し網と異なり、漁獲物をはずす手間もなく、漁獲して速やかに氷でシメることができるので鮮度も良く、市場への出荷も容易である。潮の流れを読んだり、技術的に難しい漁法だが、使いこなせば水揚げが期待できる。(図14)

また、昼間に行う漁業なので、地元市場のセリには間に合わない課題が残っているが、まずは許可を得て、どのくらい漁獲できるか把握することが先だと考えている。当初は、地元漁協へ出荷し、操業が安定してきたら、鹿児島市場や他市場への出荷も検討したい。

この地域で、漁業を継続するには、この漁法しかないと考え、この漁法にかけている。漁船や漁具は、すでに購入し、近隣の漁業士のもとで操業の研修を行いながら、現在、許可申請しているところである。購入した漁船と漁具は、ごち網漁業の実績があるので、違うのは乗り手だけである。使いこなせば、必ず結果がついてくると信じている。

ごち網漁業は、従業員を雇う必要があるが、組合員の増加にも役立つほか、自分が成功すれば、自分に続く若い人が出てくることを期待している。

最後に、私達の所属する笠沙町漁協をはじめ、水産業は、地域に若者がいなくなり、著しい高齢化の波が押し寄せ、将来の地域漁船漁業の存続に強い危機感を覚えている。今後、若い担い手が安心して漁業を行っていくためには、漁業所得が増し、安心できる生活基盤を得ることが大きな課題と考えている。私は先輩達から、いろいろ学ばせていただき、何かとお世話になってきた。これからは、私が地域に恩返しをしたい。そのためにも、私が今後も漁業者として頑張り、漁業でも安心して生活できることを示すことが、大切なことと考えている。

私の取組が、地域の活性化の一助になることを願っている。

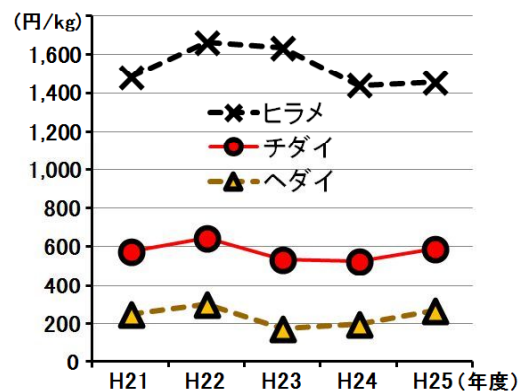


図13 主要魚種の平均単価の推移

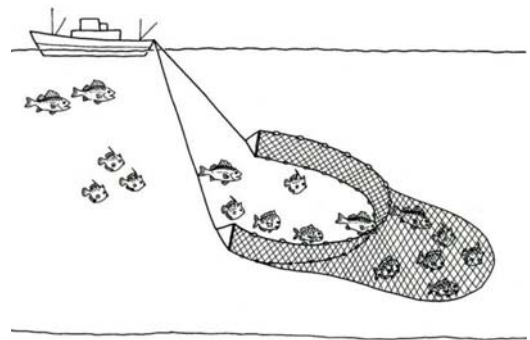


図14 ごち網漁業の操業図